

3 鄴城出土の北朝瓦の製作技法

朱 岩 石・何 利 群

(中国社会科学院考古研究所)

A 鄴城の概要

鄴城は曹魏、後趙、前燕、冉燕、東魏、北齊6代の都であり、遺跡は河北省臨漳県の西南20 km、河南省安陽市から北へ18 kmのところに位置し、南北に並ぶ2つの城址からなる。鄴北城は曹魏時代に創建され、十六国時代の後趙、前燕、冉燕がここに都を定めた。その後、534年、北魏が分裂して、東魏が洛陽から鄴城へ遷都した。文献では、このとき40万戸が移住したが、北城が荒廃し狭いことから、鄴北城の南に南城を造営したとある。そして580年に北周の楊堅（のちの隋の文帝）が尉遲迥の乱を平定し、鄴城を破壊した。

1983年より中国社会科学院考古研究所と河北省文物研究所が合同で鄴城考古隊を編成し、鄴城において20数年、調査と発掘を継続している。その結果、鄴城南北の城壁の方向、城門の位置、道路、宮殿区の分布などが判明した⁽¹⁾。また、鄴南城の朱明門遺跡⁽²⁾、趙彭城東魏北齊皇家寺院⁽³⁾、鄴城西の建物跡、窯跡、東魏北齊皇陵区の一部の墓葬を重点的に発掘した⁽⁴⁾。以上の調査と発掘は、鄴城の都市構造に関する復原研究を大きく推進すると同時に⁽⁵⁾、大量の瓦磚類が出土したことから、北朝時代の瓦の製作技法やその変遷についても豊富な資料を提供した。



図1 鄴城平面図

B 鄴北城出土の瓦磚類

曹魏時代の鄴城は鄴北城ともいい、東魏の時に鄴南城を造営したのちも鄴北城は併用された。これまでの鄴北城の発掘で大量の北朝瓦が出土しており、そのうち、銅雀三台、宮城西側の試掘などで出土した典型的な資料を以下に概述する。

(i) 軒平瓦

東魏北齊時代の鄴北城出土の平瓦の多くは黒色か黒灰色を呈し、胎土は緻密で硬く、重厚である。凹面には光沢があり、一部に布目が残る。瓦をかざる1段あるいは2段の押圧波状

文の瓦には刻印があり、完形品は長さ 41.5 cm、幅 31 cm、厚さ 2～3.5 cm ある。

標本 87JYT14② : 34 の胎土は精良で灰色を呈し、残存長 22.9 cm、幅 28.1～27 cm、厚さ 1.5 cm ある。凸面には格子状の叩きが施され、凹面の広端には方格文がある。凹面のほかの部位は布目である。広端がよく残り、指で押圧した波状文の一部に指紋が残る。平瓦の両側面は内側から外側にむかって切り込みがあり、切り込みの外側には破面が未調整のまま残る。分割の切り込みは、瓦の厚みの半分ほどまでである（附図 1－1）。

標本 88JYT19③ : 1 の胎土は精良で黒灰色を呈し、長さ 31.4 cm、幅 25～22 cm、厚さ 7.4～5.5 cm ある。広端面には 2 段の波状文をかざる。狭端は円い唇状を呈し両側面は内側に截面、外側に破面があり未調整である。截面は平瓦の厚みの 4 分の 1 ほどである（附図 1－3）。

標本 92JYT24① の胎土は精良で黒灰色である。広端に切り込みをいれたあと、指頭で 2 段の波状文をかざる（附図 1－2）。

（ii）軒丸瓦

丸瓦の多くは黒灰色を呈し、胎土はきめ細かく、硬く焼きしまって重厚である。凸面は光沢があり、研磨している。凹面は布目である。完形品は長さ 41～48 cm、幅 15.5～18 cm、厚さ 1.8～2.5 cm である。

標本 92JYT29⑦ : 04 は瓦当が欠けている。丸瓦部の長さ 40.5 cm、幅 14.8 cm、厚さ 1.7 cm。玉縁近くは平滑で、凸面に刻印がある。丸瓦部凸面の中央には瓦釘の孔があり、前端には A1 型の蓮華文瓦当がある（附図 1－4）。

標本 92JYT29⑦ : 220 の瓦当の胎土はきめ細かく、表面は黒灰色を呈する。瓦当径 17.5 cm、厚さ 1.9～2.2 cm ある。高く浮き出た単弁の蓮華文は、表面が黒色で光沢があるが、大部分は剥落している。八弁の蓮華文は弁の幅が広く、外縁に接近している。間弁は T 字形で、蓮弁と間弁はともに外縁より高く突出する。中房には 8 つ（1＋7）の蓮子を配する。瓦当裏面には小さな丸瓦がつき、接合痕跡とナデつけの痕跡が残る（附図 1－5）。

標本 92JYT29⑦ : 0254 の瓦当は 4 分の 1 が残る。復原径約 14 cm、厚さ 1.9 cm である。泥質で灰色を呈する。瓦当面には宝相蓮華文をかざり、外縁は幅が狭く、表面はかなり粗い。瓦当裏面は平滑で、丸瓦との接合するためにキザミをつけた痕跡がある（附図 1－6）。

標本 90JYT26⑤ : 09 は、黒灰色を呈する軒丸瓦である。胎土は緻密で焼成は堅緻。瓦当は欠けている。凸面は光沢があり、黒光りした表面は一部剥落している。凸面中央には円孔があり、直径は 1.2 cm。おそらく瓦釘を差し込む孔であろう。丸瓦部凹面には布目があり、それをすり消した痕跡がある。丸瓦には蓮華文瓦当が接合され、複弁八弁で細長い間弁がある。中房は突出し、刺突で施文した蓮子をかざる（附図 1－7）。

標本 86JYT13⑦ : 95 の胎土は精良で、表面は黒灰色。瓦当径 17.1 cm、厚さ 2.6～2.8 cm。瓦当は浮き彫り状の蓮華文で八弁。弁は幅があり、中央が突出して弁端は反り返る。間弁は T 字形で、中房には計 7 つ（1＋6）の蓮子を配する。瓦当の表面は大部分剥落している。

瓦当裏面は平らだが中ほどは比較的粗いつくりで、周囲は平坦、瓦当と丸瓦の接合部は欠けている。接合部の縁にはナデつけ痕跡がある（附図1－8）。

標本 86JYT13⑦：21 は胎土が精良で、表面は黒灰色。瓦当径は 12.7 cm、厚さ 1.2 cm。瓦当は浮き彫りの蓮華文。八弁の間にはT字形の間弁があり、ともに瓦当外縁より高く突出する。瓦当の中房には7つの蓮子が配される。蓮弁の1つは欠けている。光沢があった瓦当表面は剥落している。裏面と丸瓦部の接合部は一部残り、工具の痕跡がある（附図1－9）。

（iii）磚

空心磚の 92JYT29⑦：0209 は破片で、残存長 48 cm、残存幅 29.8 cm、厚さ 3.9～4.8 cm。磚の表面には文字の刻印と文様があり、中ほどに朱雀と蓮華文の刻印がある（図2）。朱雀は高さ 13.2 cm、正面で翼を広げている。蓮華文は直径 12.5 cm、宝相で複弁、形式はⅢ式の蓮華文と同じである。磚の右側辺近くに重環文を刻印し、左側辺には「…齊天保… / …年造…」の銘がある。磚の上辺と下辺には忍冬文と回字文の刻印もある。



図2 磚（92JYT29⑦：0209）

C 鄴南城出土の瓦

鄴南城遺跡における最大規模の発掘は、1985年に実施した鄴南城正門の朱明門である。この城門の瓦磚類はひとつの大型建物から出土した資料で、学術的価値はかなり高い。1990年代に鄴南城の性格について再検討した結果、確認した鄴南城は内城であり、外側には外郭城が存在している。したがって、90年代に発掘した鄴南城の西城壁の西、約1kmのところに位置する建物遺構、2002年発掘の趙彭城仏教寺院の塔基壇などは、東魏北斉鄴城の外郭城内の遺跡である。上述の地点から出土した瓦には共通性があり、また独自の特徴もあるので、以下、出土地点別に記述する。

（i）朱明門出土の瓦

軒平瓦 鄴南城から出土した平瓦の表面はすべて光沢があり、一部の平瓦の端部には刻印がある。広端の文様から2つの型に分ける。

86JYT149②：01の胎土はきめ細かく、灰色を呈する。残存長 15.3 cm、幅 27.5 cm、厚さ 2.7 cm。凸面は無文で、やや凹凸がある。凹面は布目がある。広端面はほぼ完全に残り、上下二段に分けて工具で波状文を施す（附図2－4）。

85JYT141②：39の胎土はきめ細かく、灰色を呈する。残存長 9.8 cm、幅 26.4 cm、厚さ

2.8 cm。凹面、凸面はすべて光沢があり、黒灰色を呈する。広端に近いところには轆轤の回転痕跡があり、瓦の凹凸両面には一種の黒色物質を塗っている。広端面には深い沈線をいれて2段にし、さらに上下の層を2つに細分する。その後に指頭で波状文を施文するので、2層の波状文装飾ができる（附図2-5）。

86JYT154 西拡張区⑤：08 は、ほぼ完形品である。胎土は精良で、全体に濃い灰色を呈する。長さ 50.7 cm、幅 29.7～34.5 cm、厚さ 2.8 cm。広端には沈線と押圧技法で2段の波状文を飾り、狭端部は丸く調整する。凸面の広端側半分は光沢があり、狭端側半分には轆轤痕跡が残る。また、狭端近くには刻印（おそらく五堯）がある。凹面はすべて研磨して、光沢がある（附図2-7）。

軒丸瓦 丸瓦と瓦当の表面は、基本的に濃い灰色を呈する。丸瓦凸面は光沢があり、凹面は布目。一部の丸瓦の玉縁凸面には刻印がある。

86JY T149②：50 の胎土は精良で、全体に濃い灰色を呈する。瓦当径 14.1 cm、厚さ 1.5～1.7 cm。瓦当は浮き彫りの単弁蓮華文である。瓦当外縁は光沢があり、黒光りした色調を呈する。十弁の蓮弁はオリーブ形で、中央の稜脊は明瞭である。間弁は三叉形をなす。中房には、管状工具で刺突した蓮子が7つ（1+6）ある。蓮弁は外縁より高く、中房は中くぼみとなる。瓦当裏面には、丸瓦のわずかな段や接合部分のキザミが残る（附図2-1）。

86JYT137②：51 は胎土が精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径 14.3 cm、厚さ 1.5 cm。蓮華文で、九弁が均等に配される。間弁はT字形を呈し、蓮弁と間弁は瓦当外縁より高い。中房は外縁より低い。瓦当外縁は研磨して光沢があるが、表面は大部分剥落している。瓦当裏面には接合部分の痕跡が残し、キザミがみられる。（附図2-2）。

86JYT116 西隔壁北訓④：46 は完形の丸瓦部が残る。胎土は精良で、色調は濃い灰色を呈する。焼成も堅緻である。全長 36.7 cm、丸瓦部分の幅は 14.8 cm、厚さ 1.5～2.8 cm。瓦当径は 14.2 cm。丸瓦凸面は光沢があり、凹面は布目。布目には縦方向の皺の痕が残る。瓦当は単弁蓮華文で、復原すると十弁となる。蓮弁中央には明確な稜があり、間弁はT字形を呈する。蓮弁と間弁は瓦当外縁より高く、中房には管状工具で施文した蓮子があり、中央に1つ、その周囲に数個が配される（附図2-3）。

磚 空心磚 86JYT154 西拡張区⑤：07 は破片だが、残存長 34.3 cm、残存幅 13 cm、厚さ 3.1～3.4 cm。表面は黒灰色から褐灰色、内面は黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は緻密で、表面には光沢があり、内面はかなり粗く、不規則なキザミが残る。磚の表面中央には宝相蓮華文が刻印される。八弁で、蓮弁は短く平らである。周囲には3つの方形の忍冬文が刻印されている（附図2-6）。

（ii）趙彭城東魏北齊寺院等出土の瓦

04JYNH2：6 は蓮華文軒丸瓦、胎土は精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径は 14.2 cm、厚さ 2.2～1.5 cm。瓦当は九弁蓮華文で、表面は滑らかであり、蓮弁は細長い。間弁はT字形

で、蓮弁と間弁は瓦当外縁より突出する。中房は蓮弁より低く、1 + 6の蓮子が配される。瓦当と丸瓦の接合部分には放射状のキザミがあり、接合粘土の痕跡も残る（附図3-5）。

04JYNH2:aは蓮華文軒丸瓦。胎土は精良で、全体に灰色を呈する。残存部分の径6.8 cm。瓦当には三弁の蓮弁が残り、全体で十弁あったと考える。瓦当表面と側面は光沢があり、蓮弁は幅が広く、間弁は短小である。瓦当裏面に残る網目状のキザミは珍しく、丸瓦の端面にもこのキザミの痕跡が残っているはずである（附図3-6）。

04JYNH2:3は蓮華文の軒丸瓦、胎土は精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径6.7 cm、厚さ1.1~0.9 cm。瓦当は九弁蓮華文、間弁はT字形、連弁の外周には密な珠文がめぐる。中房には1 + 6の蓮子がある。瓦当裏面と丸瓦の接合痕跡がある（附図3-7）。

04JYNH2:2の蓮華文瓦当は、胎土が精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径7.9 cm、厚さ1.4~0.8 cm。瓦当は九弁蓮華文で、蓮弁はやや短い。間弁はT字形を呈する。中房には1 + 6の蓮子がある。瓦当裏面と丸瓦の接合部には放射状のキザミがあり、接合粘土の痕跡もある（附図3-8）。

鷗尾は漳河で採集した資料で、胎土は精良、全体に灰色を呈する。表面は風化がはげしい。残存高29 cm。頂部を欠いているが、大棟と接する部分には円孔が1つあり、孔の直径は0.7 cm（附図3-1~4）。

（iii）鄴南城郭城内の建物遺構出土の瓦

軒平瓦と平瓦 計66点、ほとんどが破片で、A型~C型の3つに分類する。

A型：9点。青灰色で凸面には凹凸があり、すり消された太い縄叩きの痕が残る。凹面もそれほど平滑ではなく、すり消された細い縄叩きの痕がある。94JYT554-559②:7は、欠けていて長さは不明だが、幅は完全に残っている。残存長23.8 cm、幅29.8 cm、厚さ1.7~2.0 cm。広端面には1段の波状文がある（附図6-1）。

B型 8点。灰色を呈し、凸面は無文で凹面には布目が残る。94JYT554-559②:8は破片で、残存長15 cm、残存幅14.2 cm、厚さ1.6~2.4 cm。

C型は3つの亜型に分かれる。

C1型は12点。凹凸面とも無文で、光沢がある。94JYT555②:4は長さ33.2 cm、幅21.5 cm、厚さ1.6~1.9 cm（附図6-2）。

C2型は5点。凸面は無文。凹面は黒灰色で光沢があり、広端面には1段あるいは2段の波状文をかざる。94JYT554②:1は、残存長16.7 cm、広端幅26.3 cm、厚さ1.8 cm。1段の波状文をかざる（附図6-3）。

C3型は4点。凹凸両面とも黒灰色で光沢があり、1段あるいは2段の波状文をほどこす。94JYT554②:3は破片で、残存長14.6 cm、残存幅19.7 cm、厚さ1.8~2.4 cm。2段の波状文で、凸面には朱色を塗った痕跡が大きく残る。

軒丸瓦と丸瓦 丸瓦は計42点。多くは破片で、2つの型に分類する。

A 型 21 点。半円筒状でつくりはよい。玉縁は傾斜して丸瓦の狭端と緩やかに接合する。凹面には縦方向の溝状の痕があり、いくつかの資料には横方向の粘土紐の痕跡がみられる。凸面は無文、凹面には布目がある。94JYT554② : 2 は、長さ 31.6 cm、幅 14.1 cm、厚さ 1.3 ~ 1.6 cm、玉縁の斜長は 5.2 cm。94JYT555② : 2 は、長さ 35 cm、幅 14.8 cm、厚さ 1.5 ~ 1.9 cm、玉縁の斜長は 4.5 cm (附図 6 - 5)。

B 型 21 点。形や製作方法は A 型と一致するが、凸面は黒灰色で光沢があり、凹面は布目が残る。94JYT555② : 1 は、長さ 36.1 cm、幅 14.1 cm、厚さ 1.1 ~ 1.8 cm、玉縁の斜長は 5.0 cm。94JYT554 - 559② : 6 は、長さ 34.6 cm、幅 14.4 cm、厚さ 1.3 - 1.7 cm、玉縁斜長は 5.2 cm (附図 6 - 6)。

瓦当は計 69 点あり、すべて単弁蓮華文である。瓦当裏面は平らで、丸瓦接合部には放射状のキザミがある。色調は青灰色を呈するが、一部は黒灰色で光沢がみられる。破片のため分類できない 24 点をのぞき、そのほかのものを 6 つの型に分類した。

A 型は 2 つの亜型に分かれる。

A1 型 15 点。中房は突出し、1 + 6 の蓮子がある。蓮弁は九弁で細長い。94JYT557② : 6 は、瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.8 cm、厚さ 1.0 ~ 1.5 cm。中房部分は剥落しているが、外縁は残りがよい (附図 6 - 7)。

A2 型 8 点。中房は突出し、蓮子は 1 + 8。蓮弁は九弁で、短くまるい。94JYT554 - 559② : 1 は、瓦当径 14.7 cm、外縁幅 1.5 cm、厚さ 1.0 ~ 1.7 cm。外縁は残りがよく、瓦当裏面に丸瓦の一部が残っている (附図 6 - 8)。

B 型 は 2 つの亜型に分類する。

B1 型 4 点。中房はくぼみ、蓮子は 1 + 6。蓮弁は九弁で、比較的細長い。94JYT559③ : 1 は半分ほどが残存し、瓦当径 12.1 cm、外縁幅 1.8 cm、厚さ 1.3 ~ 1.6 cm (附図 6 - 9)。

B2 型 9 点。中房はくぼみ、蓮子は 1 + 8。蓮弁は九弁で、短くまるい。94JYT559② : 1 は外縁がよく残り、瓦当径 14.3 cm、外縁幅 1.6 ~ 1.8 cm、厚さ 1.7 cm (附図 6 - 10)。

C 型 2 点。中房は突出し、蓮子は 1 + 6。蓮弁は十一弁で細長い。94JYT554 - 559② : 4 は半分ほどが残存し、瓦当径 14 cm、外縁幅 1.5 cm、厚さ 1.3 ~ 1.5 cm (附図 7 - 1)。

D 型 4 点。中房はくぼみ、蓮子は 1 + 6、蓮弁は十一弁で細長い。94JYT556② : 1 は半分近く残存し、蓮弁は摩耗している。瓦当径 14 cm、外縁 1.5 cm、厚さ 1.6 cm (附図 7 - 2)。

E 型 2 点。中房は突出し、蓮子は 1 + 8。蓮弁は九弁で、短くまるい。外縁は幅広い。94JYT557② : 1 は完形で、瓦当径 13.5 cm、外縁幅 2.0 cm、厚さ 1.5 ~ 1.8 cm (附図 7 - 3)。

F 型 1 点。中房は突出し、蓮子は 1 + 6。蓮弁は九弁で、比較的細長い。蓮弁の外周には珠文がめぐる。94JYT557② : 5 は一部欠けており、瓦当径 15 cm、外縁幅 1.7 cm、厚さ 1.6 cm (附図 7 - 5)。

その他 鴟尾は 1 点出土した。94JYT557② : 17 は残存高 39.2 cm。胎土はきめ細かく、全

体に灰色を呈する。残存するのは鰓尾の左側後方部分で、後方に巻き上がる鰭5段と腹部である（附図7-5）。獣面装飾は1点。94JYT557②：12は残存高15cm。胎土はきめ細かく、全体に灰色を呈する。獣面は左の頬の上唇、上の歯、髭と足の爪が残り、そのほかの部分は剥離している。内面は凹凸があり、平らではない（附図7-6）。方磚は1点。94JYT557③：5は正方形に近い。長さ34～34.7cm、厚さ6.9cm、両面とも無文で、磚の側面は磨いて斜面を形成している（附図7-7）。

D おわりに

（i）鄴城における北朝瓦の製作技法の特徴

鄴城の銅雀三台からは、胎土が良好で焼成温度の高い瓦が多く出土する。宋代以来の文人は、それを研磨し、瓦硯として利用した。曹操の銅雀三台から出土したいわゆる銅雀瓦硯は懐古的で趣を備えた文房具となったのである。しかし、黒灰色で光沢があり、胎土が緻密で堅い瓦は、決して三国時代の遺物ではない。それらは、実は鄴城の北朝時代の地層から出土したものなのである。

鄴城の東魏北斉時代の地層から出土した平瓦、丸瓦の大多数は質が非常に高く、もっとも典型的な瓦当は黒光りする瓦である。それらを観察すると、瓦の表面の黒光りする現象は、おもに生瓦の状態でミガキと液体をかける工程によることがわかる。鄴城出土の北朝の平瓦は、一般に全体に光沢があり、凹面は凸面にくらべて滑らかできれいである。一方、丸瓦は凸面を研磨し、凹面は製作工程でついた布目の痕跡が残ったままである。丸瓦と平瓦の研磨の重点部位は、いずれも屋根に葺いたとき、瓦の表面となる面である。

鄴城の北朝時代の層から出土した平瓦、丸瓦の痕跡の観察をとおして、それらの製作技法を基本的に理解することができた。以下、おもな工程の区分を試みたい。

粘土作成 鄴城出土の北朝時代の平瓦、丸瓦のほとんどは胎土がきめ細かい。一部の破片をみると、練りこんだあとにできた皺が残っており、瓦をつくる前に粘土を水簸し、捏ねる工程があったことがわかる（図3）。重厚な大型の平瓦は粘土の量が多いが、胎土には砂礫や夾雑物が非常に少なく、水簸をして一定時間粘土を寝かせていることは間違いない。

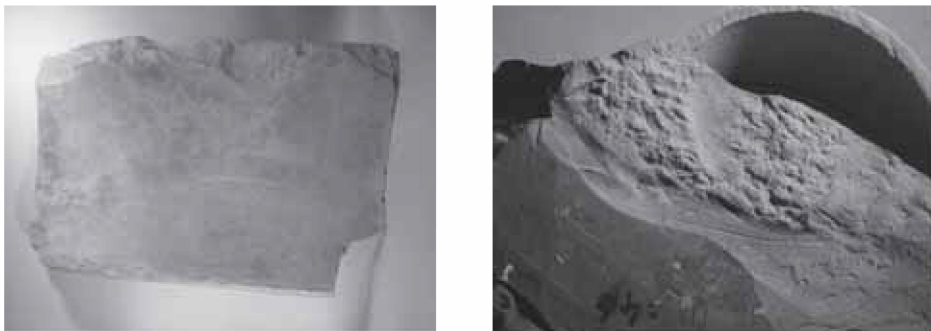


図3 瓦の破片や破面に胎土の細かさがあらわれている

粘土円筒の成形と轆轤による調整 現在知られる鄴城の北朝時期の丸瓦と平瓦は、すべて粘土紐を巻きあげて製作しており、粘土片を貼り合わせた例はみられない。粘土紐巻上げの痕跡は丸瓦の凹面に顕著に残り、一部の平瓦の破片にも上記の結論を支持する痕跡がある。

粘土円筒を作成するさいには、まず轆轤の上に木棒で模骨を支え、つぎに粘土紐を模骨の外側に巻き上げていき、叩きをへて平瓦あるいは丸瓦の粘土円筒を作成する。つづいて、轆轤を回転させて円筒を調整する。このときの調整痕跡は瓦を観察するたびに目にすることができるが、つぎの研磨工程のため、轆轤の回転痕跡が見落とされることもありがちである。轆轤での調整後、一部の平瓦や丸瓦には文字を刻印するが、刻印と轆轤調整の重複関係から両者の順序を確定することができる（図4）。

平瓦の広端の波状文は、轆轤調整の前後に完成する。このとき円筒はまだやわらかくキザミや押圧施文などがしやすい。2段の波状文の間には深い沈線があり、指頭で施文したときの指文があることから、このような製作順序を導き出すことができる。



図4 轆轤調整後に押印

円筒の陰干しと分割 表面を調整し終えた円筒は、まだ轆轤上の模骨に張り付いているが、円筒が完全に乾燥する前に、円筒の内側の模骨を取り出す。ナイフの類の鋭器を用いて、内側から外側に向かって、平瓦や丸瓦を分割するための縦方向の切り込みを入れる。この截線の深さは一致しない。一般には、丸瓦は円筒の2分の1、平瓦は円筒の厚さの4分の1ほどである。つぎに、適当な時期に円筒を分割して、平瓦か丸瓦を作成する。この段階の平瓦や丸瓦には、凹面の布目や回転痕跡など、製作時の痕跡が多く残る。これらは、さらなる加工や調整の前段階である（図5）。

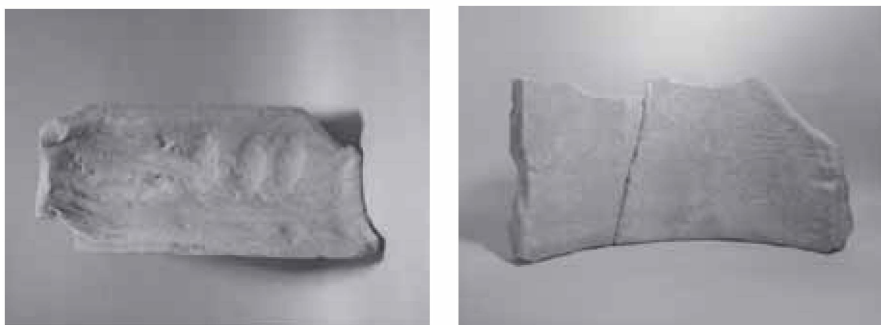


図5 丸瓦と平瓦 凹面にある布目、ミガキの前段階

生瓦の研磨と調整 鄴城の黒光りする瓦の表面は、釉の感じに似ている。この黒光りする面は、おもに丸瓦の凸面と平瓦の凹面である。これは、屋根にのせたときに表に露出する部分であり、明らかに実用と装飾の2つの機能を備えている。一面では、建物の屋根部分の表面を滑らかできれいにし、雨水が浸透するのを防ぐ。また、建物の屋根部分が青黒い光沢をもつというのは、非常に美しいものである。

この瓦の表面を仔細に観察すると、90JYT26⑤ : 09 では、表面に断面円形の棒に似た工具で何度もミガキをかけた痕跡がある。この痕跡はややくぼんでいるようにも見えるが、反復してミガキをかければ、瓦の表面はさらに滑らかできれいになり、ミガキの痕のくぼんだ溝もほとんど目立たなくなる。それは同時に、ミガキの工程の生瓦が、まだ完全に乾燥していない状態であることも示している。

軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合部分を観察すると、丸瓦部の凸面と瓦当側面は、一連でミガキがおこなわれている。それは、瓦当の接合後にミガキをかけたことを示している。朱明門から出土した T149② : 50 の蓮華文瓦当は、瓦当裏面の丸瓦接合部分に網状のキザミがあり、これは瓦当と接合する前に、接合部分にキザミをいれたものである（図6）。このことは、接合前の丸瓦の乾燥度合いが瓦当よりも進んでいることを示す。そして、乾燥して接合がしっかりした段階（まだ完全には乾燥していない）で、丸瓦部と瓦当を一気に研磨する。



90JYT26⑤ : 09



T149② : 50

図6 丸瓦凸面のミガキと瓦当裏面のキザミ

生瓦表面の黒塗り技術 北朝時期の黒光りする瓦の大多数は黒灰色だが、一部の表面には銀白色で光沢のある状況がみられる。これは、窯で焼成する前に、瓦の表面になにか特別な物質を塗布したのであろうか。この点に関して、いまだ自然科学的な分析結果はない。

鄴城出土の一部の瓦には、表面に液体が流れた痕跡がみられ、その液体は黒灰色を呈する。文献によると、『嘉靖彰徳府志』が『鄴都宮室志』を引いて、閭闔門内に位置する太極殿の「瓦は胡桃油を用いる。輝きが目を奪う」とある。これは鄴城出土の北朝時期の黒光りする瓦に独特の現象であり、今後の研究が待たれる。

窯入れと焼成 窯入れと焼成は最後の工程である。鄴南城西で瓦磚窯が発見され、うち1

基の窯跡から、「慕容□□」の刻印をもつ丸瓦が集中して出土した。この丸瓦は黒灰色で、焼成温度も非常に高い。窯跡の規模は一般に小さくなく、通長 8 m ほどである。いくつかの窯跡が 1 箇所集中して出現する現象がある。

(ii) 鄴城における造瓦技術研究の学術的意義

鄴城の瓦の研究で進歩したのは、類型学方面の分類と比較研究である。これは重要な基礎研究のひとつである。今回は、それにくわえて瓦の製作技法の考察に重点をおき、製作工程を明らかにした。それは、粘土捏ね、円筒成形と轆轤調整、円筒の陰干しと分割、生瓦のミガキと調整、瓦への塗布をへて、最後の焼成にいたる工程である。

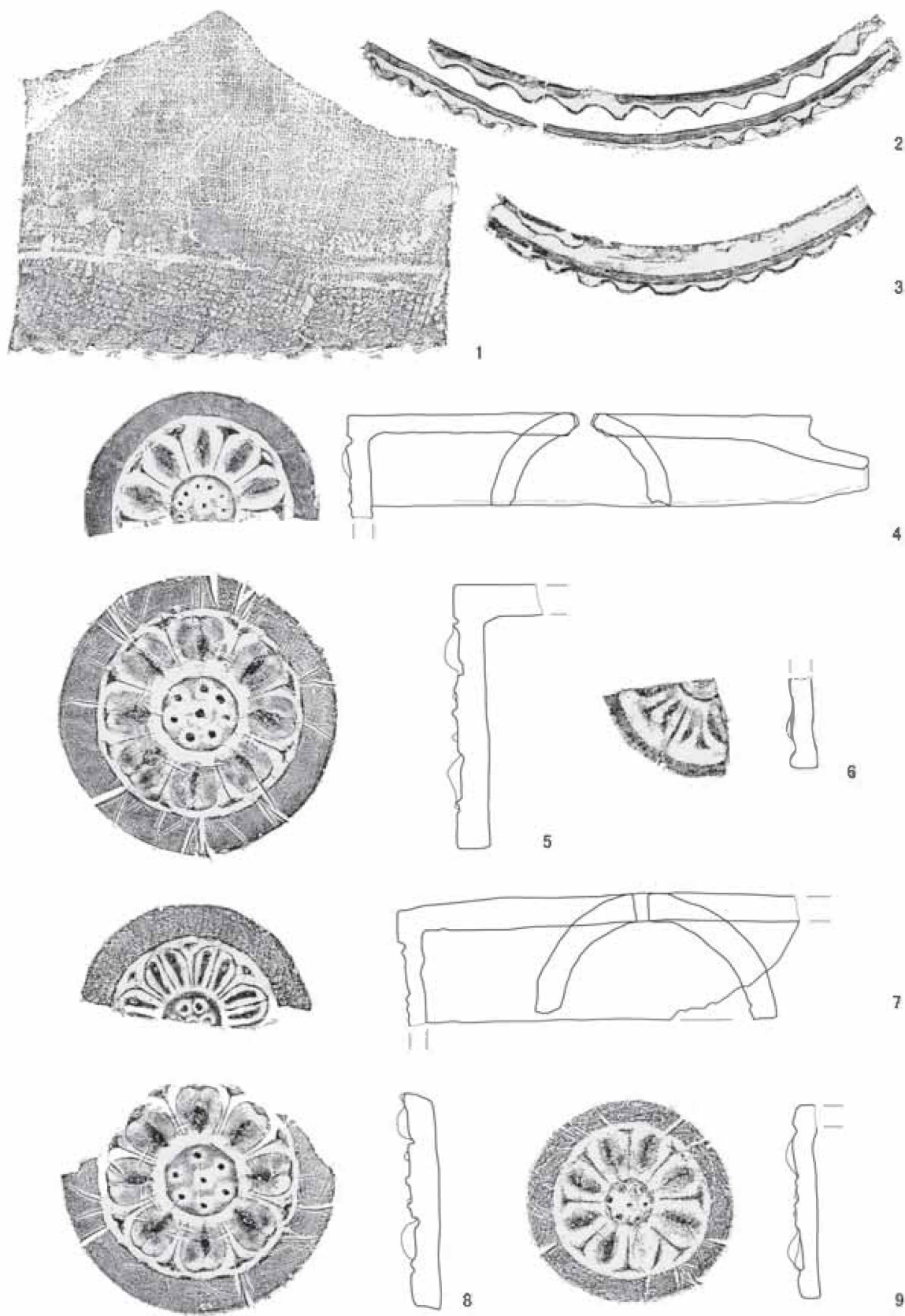
これらの技術は、北魏洛陽城と直接的に関係する。すなわち、534 年に東魏が洛陽城から鄴城に遷都し、その政治制度、文化的伝統、技術などを継承したことが、北魏洛陽城と密接で不可分な関係をもつ理由である。瓦の製作技法はその一例にほかならない。

その後、581 年には隋が建国するが、その都城である大興城の造営技術は、東魏北齊の鄴城と深い関係をもっていた。鄴城の北朝瓦の製作技術と隋唐長安城の造瓦技術の比較研究が、これらの文化的関係を明らかにすることは疑いない。文化の異同の比較と総括は、まさに都城考古学の重要な課題なのである。

鄴城の造瓦技術の研究の意義もこの点にあるが、鄴城出土の北朝瓦の考察はいまだ不十分で、一部の問題についてはまだ提起されたばかりの状況にある。また、南北朝や隋唐期のそれぞれの大型都市遺跡から出土した資料を整合させる学際的協力も必要である。今後、鄴城におけるこうした方面の研究をさらに深化させる必要があろう。

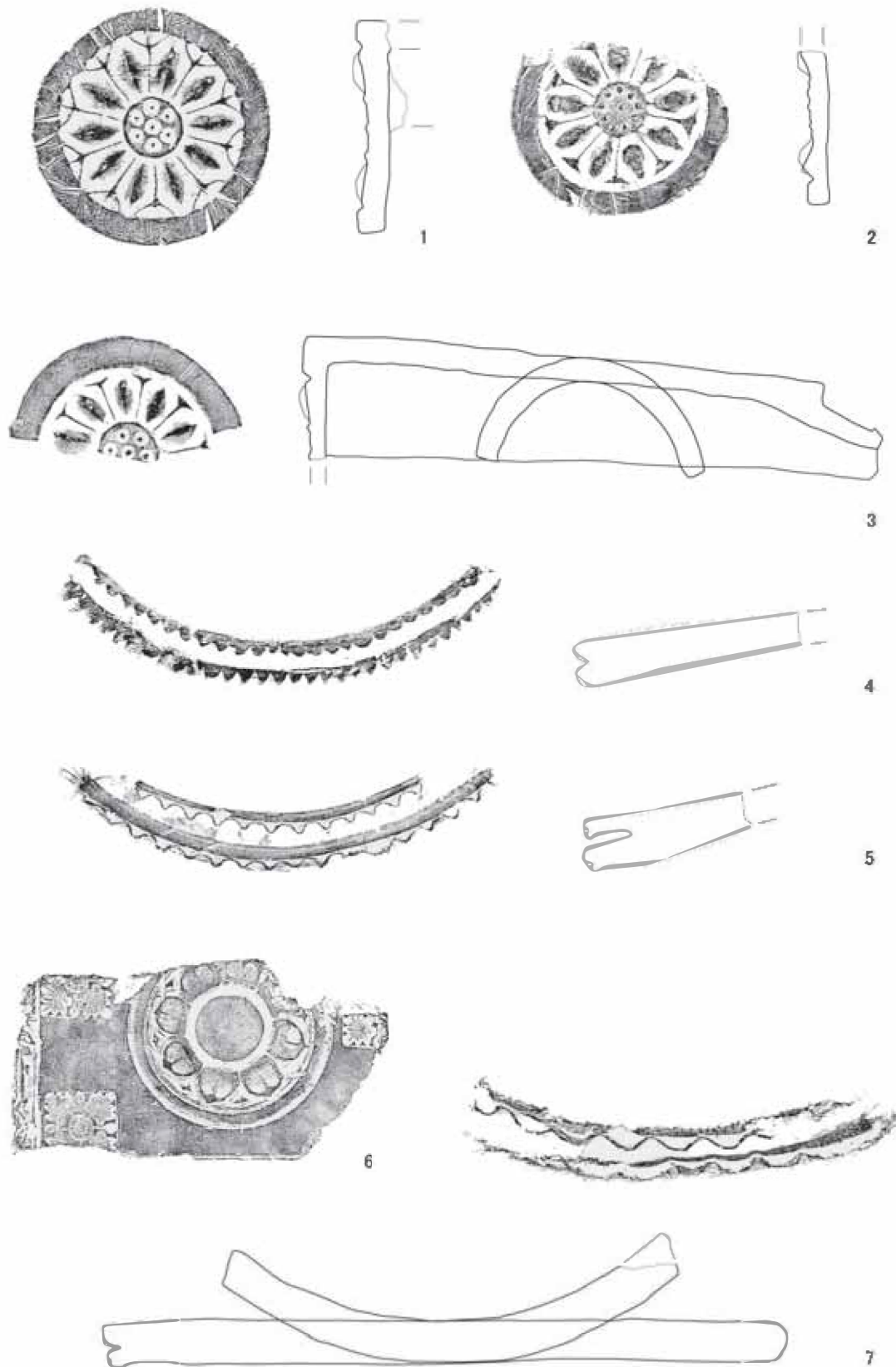
註

- (1) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作隊「河北臨漳鄴北城遺址勘探發掘簡報」『考古』1990 年第 7 期。b.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作隊「河北臨漳縣鄴南城遺址勘探与發掘」『考古』1997 年第 3 期。
- (2) 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作隊「河北臨漳縣鄴南城朱明門遺址的發掘」『考古』1996 年第 1 期。
- (3) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作隊「河北臨漳縣鄴城遺址東魏北齊佛寺塔基的發現与發掘」『考古』2003 年第 10 期。b.朱岩石・何利群「河北鄴城遺址北朝佛教寺院考古獲階段性成果」『中国文物報』2005 年 3 月 4 日第 1 版。
- (4) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所『磁縣灣漳北朝壁画墓』科学出版社 2003 年。b.中国社会科学院考古研究所河北工作隊「河北磁縣北朝墓群發現東魏皇族元祐墓」『考古』2007 年第 11 期。
- (5) a.徐光冀「東魏北齊鄴南城平面布局的研究」『宿白先生八秩華誕紀念文集』(上)、文物出版社、2002 年、pp.201~215。b.徐光冀「曹魏鄴城的平面復原研究」『中国考古学論叢』科学出版社、1993 年。c.朱岩石「東魏北齊鄴南城内城之研究」『漢唐之間的視覺文化与物質文化』文物出版社、2004 年、pp.97~114。



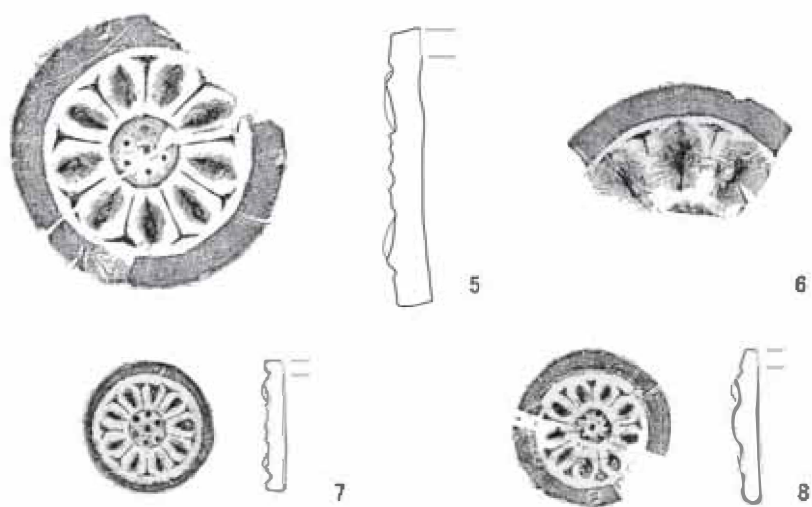
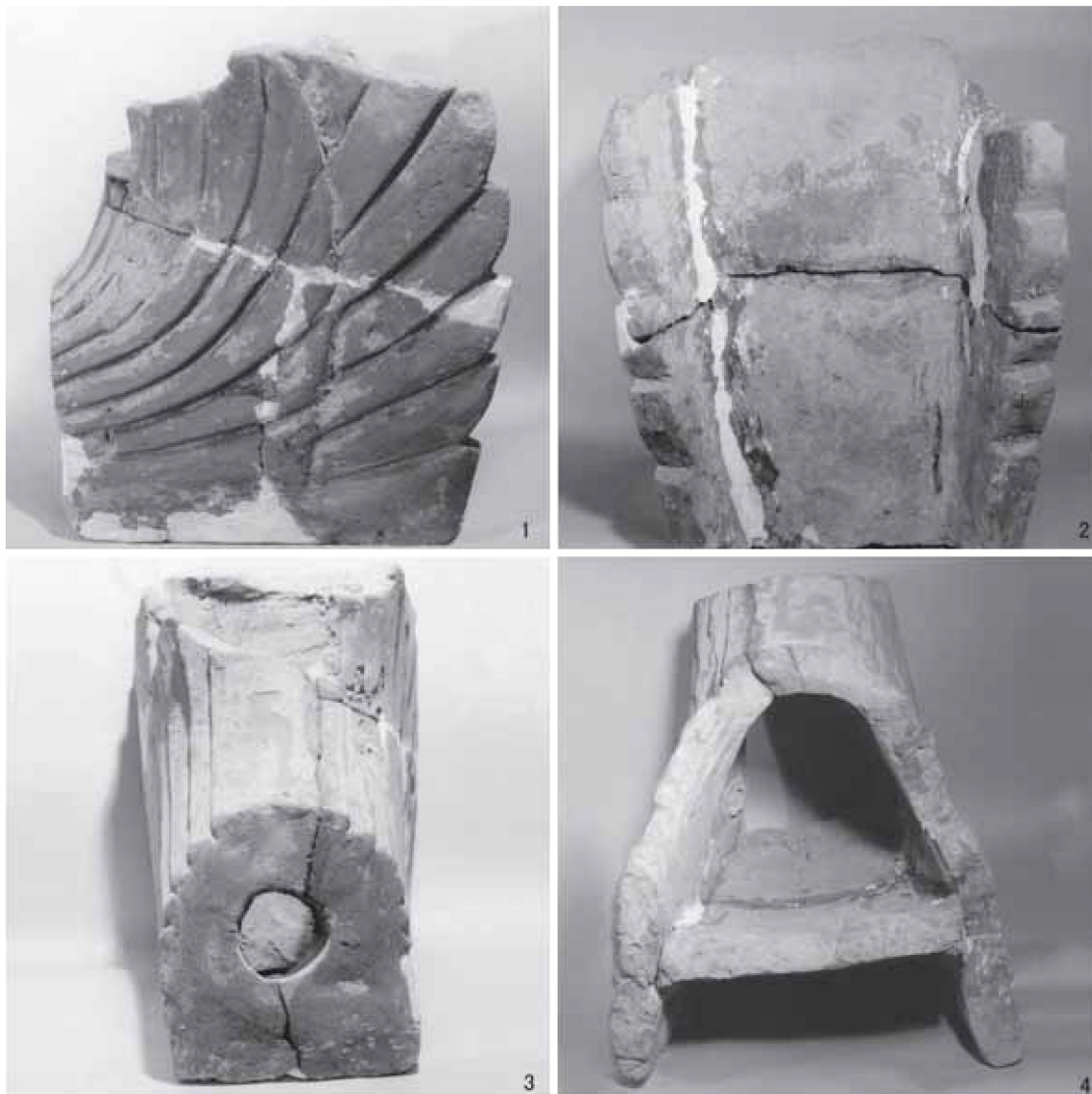
1. 81JYT14 ② :34 2. 92JYT24 ① 3. 88JYT ③ :1 4. 92JYT29 ⑦ :04 5. 92JYT29 ⑦ :220
6. 92JYT29 ⑦ :0254 7. 90JYT26 ⑤ :09 8. 86JYT13 ⑦ :95 9. 86JYT13 ⑦ :21

附圖 1 鄴北城出土瓦 (1:4)



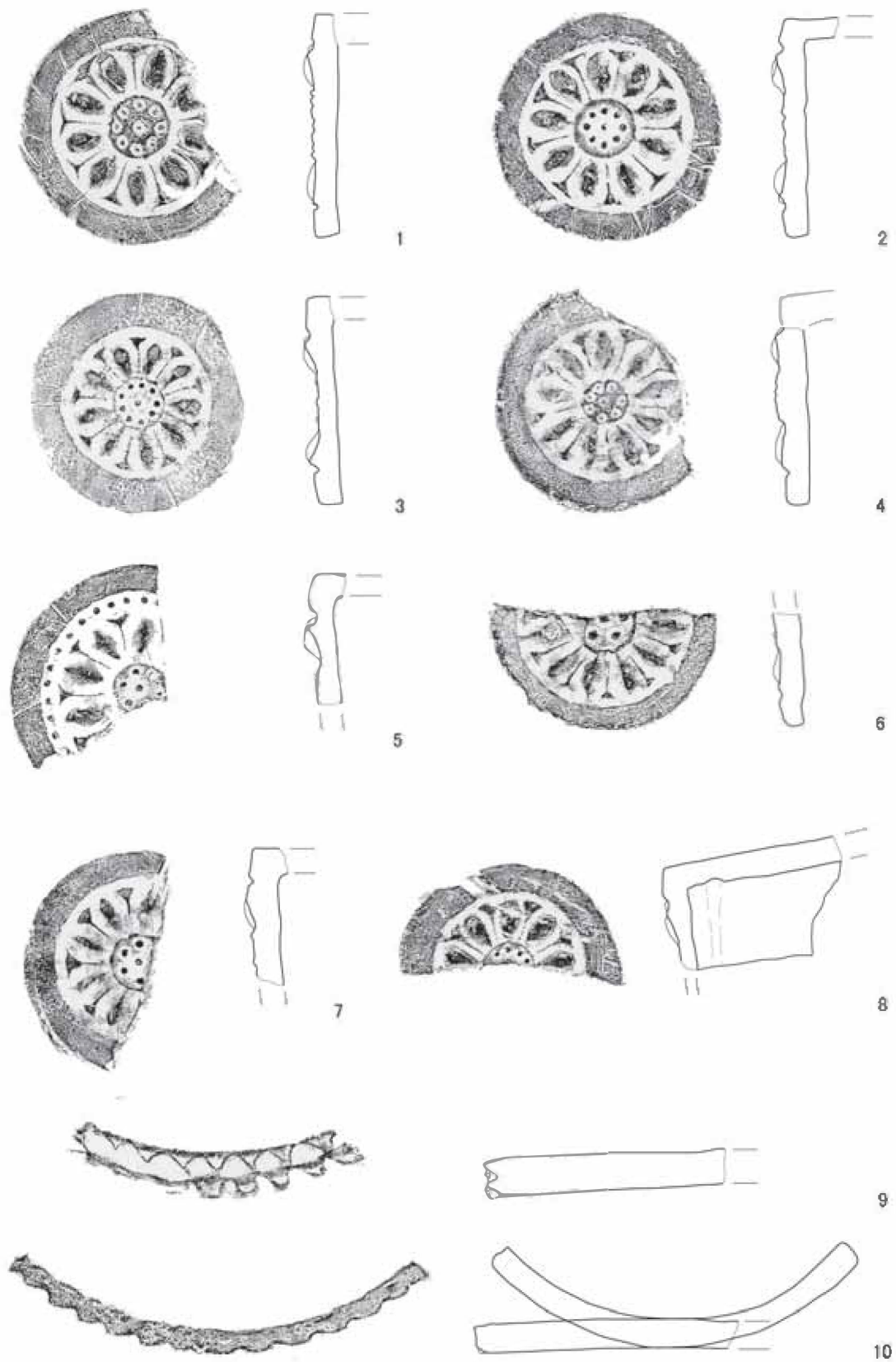
1. 86JYT149②:50 2. 86JYT137②:51 3. 86JYT116西隔壁北訓④:46 4. 86JYT149②:01
5. 85JYT141②:39 6. 86JYT154西拡張区⑤:07 7. 86JYT154西拡張区⑤:08

附図 2 鄴南城出土瓦 (1:4)



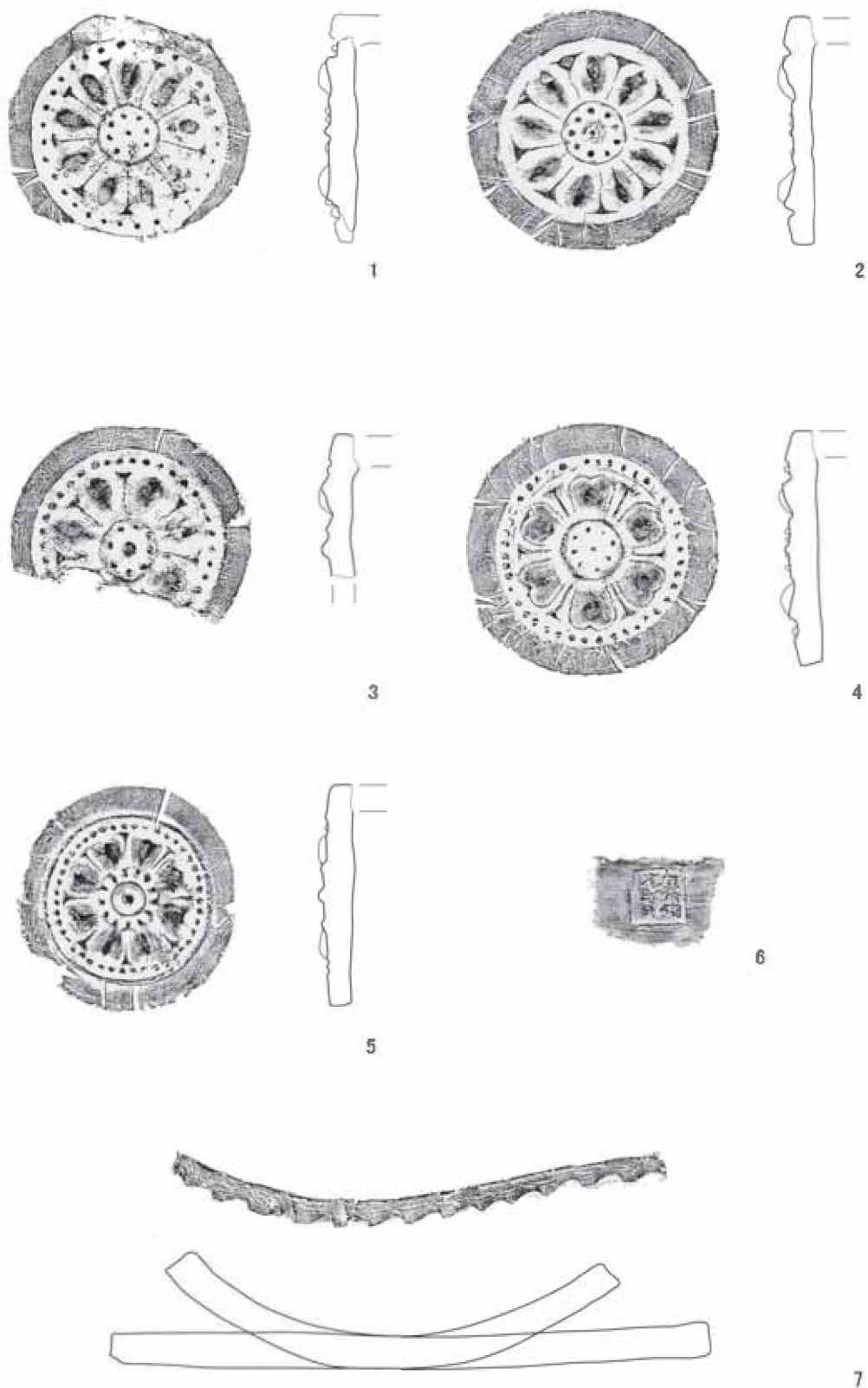
1-4. 漳河採集陶鴟尾 5. 04JYNH2:6 6. 04JYNH2:a
7. 04JYNH2:3 8. 04JYNH2:2

附圖 3 鄴城出土瓦 (1:4)



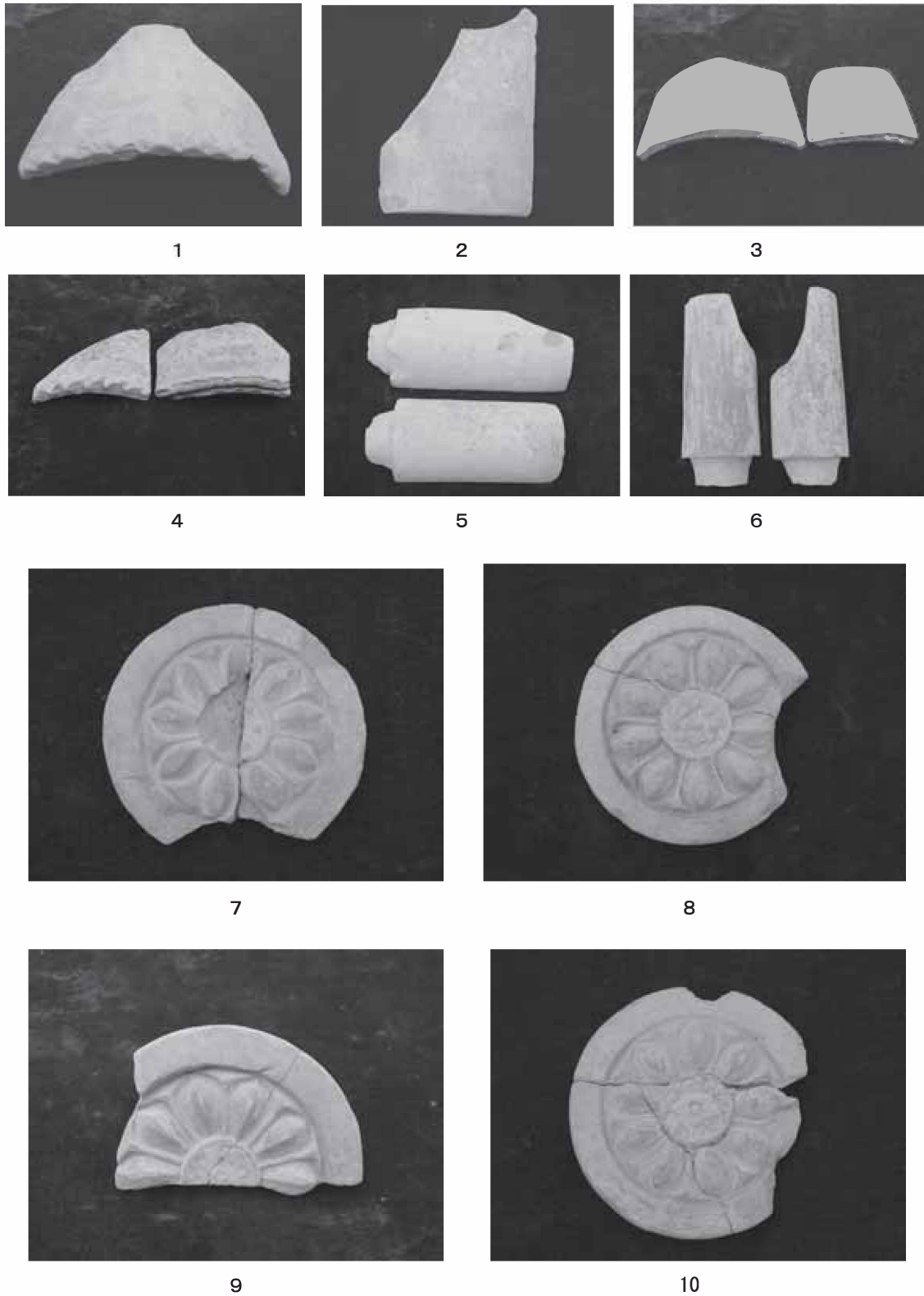
1. 94JYT559 ② 2. 94JYT554 3. 94JYT557 ② 4. 94JYT558 5. 94JYT557 ②
6. 94JYT554 ② 7. 94JYT559 ② 8. 94JYT557 ② 9. 94JYT557 ③ 10. 94JYT554 ②

附図 4 鄴南城西郊建物址 (1:4)



1. 94JYT401H1251:6a 2. 94JYT417 ③:2 3. 94JYT417 4. 94JYT401H1251:6b
5. 94JYT405 ③ 6. 94JYT0913Y3 7. 94JYT0913Y3

附図 5 鄴南城西郊および窯址出土瓦 (1:4)



1. 94JYT554②:7 2. 94JYT555②:4 3. 94JYT554②:1 4. 94JYT555②:3
 5. 94JYT554②:2, 94JYT555②:2 6. 94JYT555②:1, 94JYT554②:6
 7. 94JYT557②:6 8. 94JYT559②:1 9. 94JYT559③:1 10. 94JYT559②:1

附図6 鄴南城西郭城内建物址出土の瓦



1



2



3



4



5



6



7

1. 94JYT554②:4 2. 94JYT556②:1 3. 94JYT557②:1 4. 94JYT557②:5
5. 94JYT557②:17 6. 94JYT557②:12 7. 94JYT557③:5

附図7 鄴南城西郭城内建物址出土の瓦